

ほっかいどう NIE 通信

Newspaper in Education 教育に新聞を



発行 北海道NIE推進協議会

〒060-8711 札幌市中央区大通西3丁目6 北海道新聞社内
TEL 011-210-5802 FAX 011-210-5826

NIEを点から線に

鹿児島で
全国大会 理論化の大切さ強調

第10回NIE全国大会(日本新聞教育文化財団主催、南日本新聞主管)が7月28、29の両日、鹿児島市で開かれ、教育、新聞関係者や地元
の父母ら約800人が参加。NIE活動のさらなる発展を目指し、節
目の大会にふさわしい熱い議論を繰り広げた。
(2面に大会の講評)

今大会のスローガンは「広げよう深めようNIE」。初日のパネルディスカッションでは、日本NIE学会の寺尾慎一福岡教育大学教授や札幌市立月寒中の三上久代教諭ら5人のパネリストが、NIEを点から線へ広げる課題などについて、会場の意見も交えながら、活発に話し合った。

まず、初めて新聞を使う先生のために、積極的なNIE授業の公開や、実践手引き書の充実などが壇上から提案された。一方、会場の参加者が

今から十数年前、5年生を担任しているときのこと、何気なく子どもの会話を聞いてみると、昨日のニュースにあった難しい言葉が話題に上っていて驚くことがあった。



浪岡 美保

釧路市立武佐小教諭

どうしてそんな言葉を知っているのかとずねると「テレビのニュースで言っていたよ」とのこと。私たち大人が考えている以上に、子どもたちは社会のできごとに関心を持っ

私のNIE原点

小学生の子どもにとって、テレビニュースでは言葉のいくつかは記憶できても、その言葉の持つ意味やニュースの内容までは理解できない。その点新聞なら、いつでも何度でも読み直して、確かめることができるので教材として活

用できると考えた。そこで、朝の会の中で時々ニュースをいくつか紹介することにして、子どもたちと世の中起きてきていることについて話し合うようになった。5年生なりにさまざまな見方があり、いろいろな考えが出て

もったり、わからない言葉の意味を教えてもらうなど、家庭の協力が必要になったことから「親子の会話が aumentata」と親からも喜ばれるようになった。

その後NIEの活動に参加して、新聞を効果的に教育に取り入れた実践を知り、拙いながらもいくつか授業実践を行うことができた。いつも私が願っているのは、子どもたちの生活の中に自然に新聞が取り入れられ、世の中にあふれる雑多な情報の中から自分にとって必要な情報を選択できる力、さらに知識を広げてほしいというところである。



討論のまとめで、寺尾教授は「高められた力が読書や論文発表、討論などに生かされなければ本物のNIEとは言えない。NIE活動は、日本の教育を必ず良くする」と強調。また、パネリストの一人、中島裕二郎南日本新聞編集委員は新聞人の立場から「新聞記事そのものの信頼性を高めるさらなる努力が必要」と、決意を語った。

2日目の小、中、高校別の分科会では、家族で新聞に親しむファミリーフォーカスのほか、鹿児島黒豚の歴史と課題、患者を人間扱いしてこなかったハンセン病問題など、地域に関係が深い題材を中心に公開授業や実践報告が行われ、新聞などのメディアを批判的に読み比べる大切さなどがあらためて確認された。

燃えた夏

暑い夏だった。真夏日が続く中でヒマワリが一番さわやかな顔をしていた。休み中、一部の先生は研修会に参加、部活動指導、盆踊りの指導、巡視活動と、時間に追われていた▼郵政民営化を「改革の本丸」と位置づけていた法案が少数の自民党員の反対により否決されると首相は解散という「伝家の宝刀」を行使。賛成と反対派の対立が続く波乱万丈の政界となった▼「バリバリ」と空気を引き裂き野口聡一さんらが乗ったデイスカバリーが飛び立ち、無事自力帰還した。野口さんは宇宙から子供たちと交信、宇宙空間での修理作業の大役も無事果たした。知的好奇心の旺盛な子供たち、宇宙の神秘さに目を輝かせていた▼全国高校野球は駒大苫小牧の大活躍で、また優勝旗が津軽海峡を渡ってきた。道民は連日TVに釘付け。守りからリズムをつくり、基本に忠実な駒沢野球。試合中屈託なく笑う無欲が奇跡を生んだ。しかし、残念なことに後日暴力事件が発覚し喜びに水を差した。後味悪いが、偉業は永久に残り、語り継がれるだろう。選手に罪はなく、胸を張って練習に励んでほしい▼二学期が始まった。NIEもまた忙しくなりそうだ。(高)



新聞を身近なものに

15年ほど前、当時教員を目指しキャンパスに足を運んでいた頃から、「子どもたちの活字離れ」という言葉は耳にしていた。その時から頭の片隅に常に残っていたものが、自分もあまり読めていなかった「新聞」であった。昨年、本採用になり、自分の行いたい実践の一つが、「新聞を学校教育にいかに取り入れていくか」であった。自分の中で、取り入れ

にくいと感じていたことは、単純だが「全ての家庭に、新聞が」ということが、単に新聞をい

経験の少ない私にとって、最高の出会いであった。小学校の高学年の児童に聞くと、新聞は基本的にテレビ番組の情報を得るところ。一歩進んでスポーツ欄と4コマ漫画までであった。「新聞をい

新聞提供が始まる。基本は昨年度と同じような実践になると思うが、より多くの教科で新聞を活用するほか、新聞を使った漢字探しゲームなど、もう少しゲーム的な内容を取り入れてみたい。また、新聞提供期間が終わっても、自分の家の新聞を切り抜いて来るなど、児童の日常の家庭生活とつながるような工夫もしたいと考えている。

まだ、いろいろな意味で未熟な部分が多いが、子どもたちの表情を見取りながら、実践を繰り返して、よりよいものを作り上げたいと思っている。



浦河町立浦河
東部小教諭

鹿海 圭吾

かに読ませるか、いかに授業に生かすか」ではなく、「新聞には量りきれないような情報が詰まっている」ということを理解させてあげる。言い換

けながら、同じ記事の各紙の読み比べをするなど、「新聞はどういうものなのか」という基本的な実践を行った。今年度は5年生の担任で、9月から

北海道新聞NIE
コーディネーター



北海道新聞NIE
コーディネーター
高辻 清敏

成果の共有へ 広い協力期待

全国大会講評

識見の高い指導者の存在、子弟の育成を忘れてはいけない。パネルディスカッションは「これまでの10年、これからの10年」と題して、これまで取り組んできたNIE活動を検証し、10年後の活動の方向性を深く議論する場であった。しかし終始実践者の報告会となりNIEのあり方については理論と体系化の必要性という抽象的な言葉で終わっていた。また、自分の実践や苦情を述べるフロアからの発言が多くテーマに迫る論議ができなかった。公開授業は校種別に開かれ地域性を生かし、地域の問題などを素材とした授業であり問題解決の手法が分かり参考になる授業もあった。

興味広げ楽しく理解

私が高校に入学したのは今から16年前。その頃、「最近の子どもはテレビばかり見て、新聞を読まない」「活字離れが深刻だ」とよく言われたものである。活字よりも映像だった。活字離れが深刻な時代の中で育った私が、社会科教師となりNIEの実践を行なっていること、ある意味で深刻な問題かもしれない。新聞の魅力って何だ？そこからスタートしなくてはなら

発点は、やはり「今の子どもたちは活字離れが深刻だ」であった。活字を読めない生徒にどうやって新聞を読ませるのか。しかし、この思い込みが実践の幅を狭めてしまっていた。その後、とりあ

代と同じだ。きっとすぐに飽きてしまうのだろう。だが、そうではなかった。提出させた簡単なレポートを読むと、予想以上にしっかりと記事を読み込んでいた。その後、とりあ

れる情報をその順に受け止めていくのではなく、自分の興味に従って求める情報を取りながら、情報の核心を読み取ることにこそ新聞の面白さがあるのだと確信した。その新聞の魅力を活かせば、きっと大きなことを楽しく理解できるだろう。逆に、社会への興味が増せば、新聞記事も今より楽しく読めるようになるだろう。NIE実践者である自分、社会科教師である自分を、なんとかこの2つを両方向から結びつけた。この思いをスタートに今年度はどんなNIE実践に取り組もうか。

第10回NIE全国大会は薩摩藩の下級武士らにより明治維新の原動力になった鹿児島市で開催された。大会の冒頭に「薩摩藩の情報収集と倒幕、維新」と題した講演があった。薩摩が幕末と維新の激動の中で統一した藩を維持できたのは全国各地、琉球、中国各地との情報エリヤの確保と情報収集の成果であった。それらを藩の知恵や知識とし、さらに藩内の情報管理の結果であった。ガラス工芸、黒豚、大島つむぎ、焼酎などがブランド化しているのは情報収集力、

大会は12校の実践校が中心となり成功に導いていた。小さな組織の大きな発信である。しかし、鹿児島大会は残念なことに、大会参加者の半数以上が鹿児島人で、九州他県の参加が極端に少なかった。九州ブロックが一丸となって共同・協力体制をつくり、研究の成果の共有化を目指すのであればNIEのねらいである「広めよう、深めようNIE」の言葉も結果せず空言に終わってしまう10年間でNIEの教育効果が検証された。点から線、面への運動を推進するために教育関係者の人的広がりが急務である。



旭川実業高
教諭

中澤 耕太

えず渡してみた新聞を、生徒が熱心に読んでいる姿を見て、最初の取り組みのスタンスは間違っていたことに気づいた。スポーツ面を広げているところまでは私の高校時

自ら興味を持つテーマが不足しているだけなのだ。スポーツの楽しさを知っている生徒は、難しい表現や細かなデータも食いつくように読んでいる。提示さ

実践に取り組もうか。

新実践校
レポート

中標津・計根別中

多教科で積極活用



これまでのコンクールで受賞した壁新聞の数々

教頭 廣川 信義

本校では、今年度よりNIEの実践指定校として、新聞を活用した教育活動を開始することになりました。これまでは「壁新聞づくり」

を通して、生徒の豊かな表現力を培う教育活動を推進してきました。例年、内容豊かな壁新聞が出来上がり、銅根地区壁新聞コンクール

「壁新聞」

の伝統も生かす

において優秀な成績をおさめてまいりました。これまでのよい伝統を継承しながら、さらに子どもたちの情報活用能力を培うため、次のように活動していくことを考えています。

研究テーマは「情報活用能力とコミュニケーション能力の育成」とし、新聞各紙を9月より4カ月間購読します。特徴としては、毎日ウィークリー(英字版)の購読を考えていることです。また、活動を開始するに当たり、校内にNIE推進委員会を設置して全体計画

を作成し、全教職員で取り組むことにしました。



「総合的な学習の時間」の発表活動に取り組む生徒

実践内容としては、①閲覧コーナーの設置②学校便りや学級通信における新聞活用③国語・社会、理科の授業における新聞活用④英語の「発展的な学習」としての英字新聞の活用⑤道徳の時間の読み物教材としての活用⑥「総合的な学習の時間」における情報活用⑦生徒の新聞活用に関する意識調査の実施—を考えています。また、本校は今年度より中標津町の研究実践校に指定され、「確かな学力をはぐくむ授業づくり」を研究主題として、校内研究の活性化を図っているところです。そこで、NIEの実践と校内研究における「確かな授業づくり」をリンクさせた特色ある教育活動を展開していきたいと思っています。

〈原稿を募集します〉

学校現場からの投稿を歓迎します。NIE関連のほかに、学校経営や児童生徒の指導、父母・地域の話題などについて400字前後にまとめてください。学校名を含め原則実名としますが、希望により匿名も可。ただし原稿にはお名前と年齢、住所、電話番号を明記してください。採用分には2千円の図書カードを贈ります。宛先は〒060-0871 札幌市中央区大通西3-6 北海道新聞社内、北海道NIE推進協議会事務局(電話011-210-5802、FAX 011-210-5826)。フロッピー処理してお送りください。

「新聞記者のやりがいや苦労は、記事の量じゃないんだなあ。うずもれた事実、書かなかったら未来永劫うずうつと知られなかったはずの事実を発掘すること」。真剣な目だ。でも、戸惑っている。△このおじさん、何だろう△。そんな顔をしている。

伝えたい 新聞の本質

△読売新聞北海道支社 報道課長 長原敏夫△



もある記者クラブも見せる。道警泊まりが仮眠するため、のくたびれたソファも……。単身赴任が3回目。そのたびに狭苦しいマンションに入居しているが、若者がほとんど新聞を取っていないことに驚く。今いるマン

い。報道とは何かということを、少しでも感じて欲しい。礼状が届く。「感動でいっぱいになって帰ってきた」。△お世辞だよ△と打ち消しながらも、年がいきなり読み返している。

読売新聞北海道支社は、中学生の職場見学を積極的に受け入れている。デスク席、遊軍席などを見せながら、質問に答える。会話の中から、多少なりとも新聞の本質を知ってもらえればと、思っている。一般の人からは批判

ションの入居数は10世帯。ドアに新聞が挟まっているのは、2世帯だけ。4紙を購読する私は、大変なお得意さんだ。新聞が若者から遠い存在になってゆくようで、さみしい。

中学生に私たち自身を見せることで、新聞に親しみを

帯広で全国新聞教育研究大会

投稿欄使い自信育てる

誕生日紙面で公開授業



参加者に公開された帯広・緑丘小の授業

新聞を活用した効果的な授業の進め方を考える第48回全国新聞教育研究大会十勝・帯広大会(全国新聞教育研究協議会主催)が8月2、3の両日、帯広市内で開

大会のテーマは「学習意欲を喚起し、生きる力を育てる新聞教育」。小中高校の教諭が全国から参加したほか、PTA新聞の編集に携わっている地元帯広・十勝地方の父母たちを含め、総勢約300人が顔をそろえた。初日はJR帯広駅に近い「とちかちプラザ」で開

かれた。新聞づくりに重きを置いた同大会の帯広開催は95年以來、10年ぶり2回目で、十勝新聞教育研究会(若山茂樹会長・前・帯広南町中学校長)のメンバーが大会運営に尽力した。(北海道新聞NIE推進センター 藤井正友)

会式を行って2日間の大회를スタートさせた。鈴木伸夫会長(東京・町田第2中学校長)のあいさつのあと、帯広・川西農協の有塚利宣組合長が「国際化における日本の農政の諸課題」と題して記念講演。続いて、参加者は「新聞づくり学習」NIE

E・総合」など6分科会に分かれ、十勝地方の7人を含め、合わせて16人の教諭がそれぞれ個性あふれた新聞活用授業を報告した。分科会では、音更町木野東小の森谷栄介教諭が総合学習の地域調べに新聞記事を多用して効果をあげている、と発表したほか、広尾町広尾中の石川晋教諭が論調の異なる複数の新聞を比較して読むメディアリテラシー教育の必要性を説いた。また、帯広柏葉高の北崎百恵教諭は新聞の投稿欄を積極活用し、文章力を磨く一方、新聞掲載で自信をつけさせる取り組みを紹介し、注目された。2日目は、会場を帯広・柏小に移し、小中6校の公開授業(各1時間)

を展開し、参加者たちは新聞活用授業の進め方を傍聴し、児童・生徒の反応ぶりをつぶさに見学した。公開授業を行ったのは、会場校の柏小をはじめ、帯広・緑丘小、豊頃町茂岩小、足寄町芽登小、帯広・大空小、鹿追町鹿追小。小学校では、柏小の岡あゆみ教諭が児童の誕生日の新聞を使った授業、茂岩小の阿部英一教諭が農水産業についてのミニ新聞づくり、緑丘小の橋本隆史教諭が新聞の投稿欄を活用した授業を行ったほか、児童10人の小規模校の芽登小は野上泰宏教諭らが、かべ新聞づくりに取り組んだ。一方、中学は、大空小の板垣洋和教諭が社会科

で消費税の増税に触れた記事を使い、身近な政治についての理解を深めたのははじめ、鹿追中の村宏喜教諭が国語科で、「戦後60年」の連載記事などをもとに新聞の比較読みによる意見発表など繰り広げた。それぞれの教室で行われた公開授業後の分科会でも、参加者たちの活発な意見が交わされ、新聞活用の学習効果の高まりを感じさせた。大会期間中、十勝新聞教育研究会のOB教諭らが速報ニュースの「とちかち野」(B4判)を合わせて5号発行した。「とちかち野」には参加者の感想、意見も寄せられ、大会を大いに盛り上げた。来年の第49回大会は、神奈川県秦野市で開かれる。

編集後記

意見交流など
◇参加申し込み・問い合わせ先 北海道NIE推進協議会事務局(北海道新聞本社内、電話011・210・5802)
◇後援 釧路教育局、釧路市教育委員会

この夏、第10回NIE全国大会が開かれた鹿児島で、驚いたことがあった。前夜に食事を取った同市内の郷土料理店での「出来事」である。「お仕事で当地へ？」と、やんわり尋ねてきた。こちらが「NIEって知っていますか」と逆に質問したところ、「ああ、News paper in Education(教育に新聞を)でしよう」とすかさず、英語で「正解」が返ってきた。

NIE(エヌ・アイ・イー、教育に新聞を)活動を支える道内の報道各社は、小中学生や高校生を対象にした「わがまち新聞コンクール」の作品を募集している。同コンクールは、日本新聞教育文化財団と新聞社、通信社が全国で展開する初の「NIE週間」(11月7-13日)の関連行事。道内では北海道NIE推進協議会に加入する朝日新聞、共同通信、釧路新聞、産経新聞、時事通信、十勝毎日新聞、苦牧民報、日本経済新聞、北海道新聞、毎日新聞、室蘭民報、読

「わがまち新聞」締め切り迫る

報道12社が募集

売新聞の12社が共同で取り組む。「わがまち新聞」は、自分が住む地域の話、名物、人物などを題材に個人またはグループ、学校単位で作成。サイズはB4判以上で、手作りでもパソコンを使ってもよい。

締め切りは9月10日。表彰には図書カードなどを贈り、全国審査にも推薦する。応募と問い合わせ先は、北海道NIE推進協議会(札幌市中央区大通西3、北海道新聞社内 電話011・210・5802)。

道教育大学で
釧路セミナー

来月10日

北海道NIE推進協議会
会は、「第4回NIE釧路

路セミナー」を開く。生きた教材である新聞を活用し子供たちの考える力、生きる力を育てる活動に取り組み先生たちが実践発表し、意見交流する。今回は、地元の道教大釧路校で初めて開設された

NIE講座を受講した教
育大生も参加する。
◇とき 9月10日(土)
午後1時開会
◇ところ 北海道教育
大学釧路校303号教室
(釧路市城山1丁目15の
55)

◇実践発表 釧路市武
佐小・浪岡美保教諭、中
標津町計根別中・廣川信
義教諭、同中・宮本進教
諭、釧路湖陵高・佐野比
呂已教諭、別海高・浅野
浩教諭
◇NIEの概要説明・

それだけに、居合わせた先生や新聞関係者は「鹿児島は市民もNIEを知っている」と大感激。これには、連日の紙面を通し大会を盛り上げた地元の日日本新聞の影響もあるのだから、北海道も負けていられない」と、一行は気を引き締めさせられた。(K)